

第6回近藤賞

2017年3月15日(水) 2017年春季研究発表会—創立60周年記念大会—(沖縄県市町村自治会館)にて、受賞者田口東氏(中央大学)により、受賞記念講演「電車・駅の旅客変動を高精度に推定する数理計画モデルの作成プロセス—2020東京オリンピック・首都圏公共交通ネットワーク・新宿駅—」が行われた。

近藤賞は、OR学会創立50周年記念事業の一つとして企画・創設されたものであり、賛助会員、正会員など多くの皆様の温かいご支援をいただいた基金をもとに運用されている。「近藤」賞という名前は、言うまでもなく、本学会元会長の近藤次郎先生に因むものである。近藤先生は、ORの分野では、PDPC(過程決定計画図)の発案や活用、国産航空機YS-11やYXの基本計画や収益シミュレーション・システムの開発などでご活躍されるとともに、国立公害研究所所長、日本学術会議会長等も歴任され、2002年には文化勲章を受章されている。先生の幅広いご活躍に因み、広い意味でのORの分野の理論および実践に関して傑出した業績を挙げた個人またはグループに対して近藤賞が贈られる。これによって、我が国におけるORが一層発展し、この分野が広く社会に知られることが期待される。

第1回の近藤賞は、創立50周年記念式典の際に茨木俊秀関西学院大学教授(当時)に授与され、第2回は小島政和東京工業大学教授に、第3回は宮沢政清東京理科大学教授に、第4回は藤重悟京都大学教授に、第5回は福島雅夫京都大学名誉教授に授与された。

今回は第6回であり、機関誌やメールマガジン等を通じて候補者の推薦をお願いしたところ、締切日の2016年9月末までに多数の会員の方から候補者が推薦された。近藤賞の選考に関しては、会長が委員長となって選考委員会を構成することが規定されている。今回の選考委員会は大山達雄会長、今野浩、伏見正則、腰塚武志、茨木俊秀、山下英明、中野一夫の各氏で構成され、慎重に検討を重ねた結果、田口東氏(中央大学教授)が選出され、理事会で承認された。

第6回近藤賞選考理由

田口東氏は、実学としてのオペレーションズ・リサーチを30数年間にわたって実践してきた。田口氏の研究スタイルは、さまざまな分野の企業からの相談に対応し、意見交換を通じて問題となっている課題の本質を見抜き、オペレーションズ・リサーチの手法を用いて解決策を与える実用研究である。田口氏の最も有名な研究成果は、2005年に発表された首都圏電車ネットワークに対する時間依存通勤交通配分モデルである。このモデルでは、約800万人の一人一人がどの電車に乗って移動するかを、実際の時刻表と鉄道利用者のアンケートに基づいて正確にモデル化し、精緻に現実を説明する解を求めている。この研究は、田園都市線の遅れの原因が急行列車の乗降に時間がかかっている点であるという意外な事実を明らかにし、その結果を踏まえて、東急電鉄は平日朝のラッシュ時に限って急行電車の各駅停車への格下げを行った。オペレーションズ・リサーチによる科学的な分析が現実社会に役立った非常に意義のある研究事例である。最近では、国土交通省からの相談に応じて、東日本大震災の復興支援を目的として、陸前高田市、釜石市、気仙沼市を含む地域におけるバス時刻表の提案を行い、日本都市計画学会2012年の年間優秀論文賞を受賞している。防災に関しても、文京区を対象として防災無線が聞こえる範囲のシミュレーションを行い、区全域の約30%の地域でしか放送内容が聞き取れないことを指摘した。この成果は2015年5月6日の毎日新聞に掲載されている。また、2016年春季シンポジウムで、東京オリンピック観戦客輸送において実際にどの地点にどの程度の混雑が起こるかを分析した結果を発表されたのは記憶に新しい。



このように、田口氏のオペレーションズ・リサーチの手法を適用した実用研究の業績は傑出しており、今後も精力的に実用研究を進めていくことが期待される。

田口氏のOR学会内での活動は極めて顕著である。1979年には、当時もっとも大きな賞であった文献賞を20代で受賞するという快挙を成し遂げた。その後、4回も事例研究賞を受賞しており、2011年には業績賞を受賞している。1997年に研究グループとして発足した「都市のOR」研究会では中心的な役割を果たし、オペレーションズ・リサーチの手法を都市や地域の現象に関する諸問題に適用する研究分野を確立することに大いに貢献した。また、学会の役職としては、庶務理事、理事OR誌編集委員長を経て、2008年から2年間は副会長を務めている。

以上のことから、田口氏が第6回近藤賞の受賞者として最もふさわしいと判断した。

(第6回近藤賞選考委員会)

田口東先生の第6回近藤賞受賞に寄せて

田口先生、近藤賞の受賞おめでとうございます。田口先生に初めてお会いしてから7年が経ちました。この7年間だけでも、東日本大震災、東京オリンピック、公共交通の活性化をテーマに、田口先生独自の視点でさまざまな研究に取り組んでいらっしゃるお姿を近くで拝見してまいりました。長年にわたって「実学のOR」を実践なさり、社会が今解決を必要としている課題に対して、ORの手法を用いて答えを提示し続けていらっしゃる田口先生が近藤賞を受賞されたことは大変喜ばしい限りです。心よりお祝い申し上げます。

中央大学に就職して一年目に「せっかくの機会だから、ORの大家として有名な田口先生の講義を受けてみよう！」と思い立ち、学部と大学院の講義に参加させていただきました。実際に田口先生の講義を受け、そのおもしろさに衝撃を受けました。数理的な内容が社会的な意識に結びつけて説明されており、ORの奥深さを感じました。

田口先生のもとには日々さまざまなところから相談が届き、現実社会にはORを必要としている人が多いことを実感します。相談内容は交通、都市計画、防災、マーケティング、ロジスティクスなど多岐にわたりますが、田口先生はひとつひとつの相談に丁寧に対応なさり、現実の課題に正面から立ち向かっていきます。相談に来る方の視点を大事にし、会話の中から問題の本質を見抜き、現実と数理を結びつけるモデルを見事に作り上げます。

モデリングでは、現場の方の意識を適切に反映することを大事にいらっしゃいます。だからこそ、企業や省庁の方との意見交換の場で田口先生が発表なさると、ORの手法を知らない方も惹きつけられて議論が盛り上がるのだと感じます。研究成果を社会へフィードバックするためにテレビや新聞を通して発信し、ORの普及にも大きく貢献なさっています。現実社会と数理をつなげるために何をすべきか、ORの研究者としてあるべき姿を日々教えていただいています。

田口先生は今も多くの課題に精力的に取り組んでいらっしゃいます。社会的に重要であることは言うまでもなく、数理的なおもしろさを秘めた課題ばかりです。田口先生のこだわりが詰まったモデルでこれらの課題に立ち向かい、今後ますますご活躍されますことを心より祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

高松瑞代（中央大学理工学部）